

薫風や背まで声にし応援歌

貞勝

号泣を形容するフレーズとして「肩を震わせて泣き崩れる」があるが、腹からの声を出して応援している様子を「背まで声にして」とするのは巧みであり、新鮮な表現である。確かに観客席の後方からみれば、熱狂して応援する歌声は背中から出ているようであり、背まで震わせて応援歌をがなり上げる様子をこのように形容しても、決して大袈裟ではない。熱狂の応援のバックグラウンドとして薫風を配するのも飄々としており、上手いと言う外はない。

春空に発止とナイフ大道芸

佳史

大道芸の演者がナイフを空に放り上げた瞬間に出会ったときの句である。ナイフは一本であろうか、連続した数本であろうか。刃の煌めきが青空に吸い込まれ、また演者に向かって落ちて来る。刃物を扱う演技は危険を伴い、観客をはらはらせるものであるが、この緊張感に溢れた演技が展開される空は、春空である。冬空としたのでは、少し即き過ぎとなるであろうが、春爛漫の空としたことによって、緊張と弛緩の良い対照の句となっている。「春空に」は、「春空へ」とすることもできる。動作の方向を直截に示すと句に勢いが出る。

赤門にこもる歳月新樹光

幸

明治の維新政府が官吏養成のために設置した東京帝国大学。今は「帝国」の二文字こそ外されたが、相変わらず全国の俊英が集まる大学である。その象徴としての「赤門」が新樹光の中に浮かび出ている。当初の目的を果たして各分野で活躍した者も多いであろうが、挫折した者も少なからずいる。まさに色々な若者の人生模様が籠められた学びの門である。今年も希望に溢れた若者が来て早くも一ヶ月が過ぎ、赤門は新樹光に包み込まれている。掲句の「光り」は、その対極にある「陰」も含意しているようだ。

万緑の底に沈みし池光る

溪水

大きな自然景を凝縮してつかんだ一句である。「万緑」という季語は使いこなすのが難しいとされているが、掲句は「万緑の底」と言いとめることによって、万緑を的確に自分のものとしている。緑に取り囲まれている池面の煌めきを詠んだものであるが、「池光る」と捉えることによって、池そのものよりも、池を包み込んでいる万緑の存在がくっきりと浮

かび上がらせている。

美術館渡り廊下の若葉風

秀一

渡り廊下は、一般の建築デザイン上では、ある建物と別の建物を連絡する通路であるが、美術館においては「渡り廊下」は、建物の単なる連絡手段ではない。それまでの建物に展示されていた美術品から得たそれぞれの美的感興に浸りながら渡り廊下に入り、そして、次の展示室に収蔵されている美術品に思いを馳せながら渡り廊下を通り次の建物に入るのである。渡り廊下は美術鑑賞のいわば息継ぎの場である。その渡り廊下に出たとき、若葉風が待ち受けていて呉れたのである。

こひのぼり立ちて味はふ手打ちそば

ヤエ子

マンションをはじめとする集合住宅では、小旗式の鯉幟を狭いベランダに立てる外ないが、田舎の家や街中でも旧家では、一戸建ての広い庭に太い柱を立て、鯉幟を高々と大空に泳がせている。のぼり立ては、一家一族総動員の大仕事である。その作業を終えた後、鯉幟を愛でながら、心づくしの手打ち蕎麦を食べている。鯉幟と蕎麦の取り合わせは、意外性があるが、田舎育ちの筆者には納得できる。

写経たづさへ旅立つ母よ若葉風

友子

「ご母堂の棺にご母堂がこれまで書写されて来た経文を納められたとのことである。逝去の「逝く」を使うことなく、「永久の旅立ち」を詠んだものである。これが写経のための旅行へ出発することでないことは、「たづさへ」によって理解できる。「写経」には、経文を書写する動作を言う場合と、書写された経文を言う場合とがあるが、掲句では、後者の意味で用いられている。若葉風との幹旋が良い。題材が重たいものであるだけに、季語によってバランスがとられている。

パレードにブルーライトヨコハマ浜の初夏

眞三

全国区の句ではないが、横浜近辺に在住在勤する者には、そのパレードの風景がたちどころに浮かんで来る一句である。俳句は座の文芸であるから、句座を共にする仲間の共感を得られれば良いと言うことであろう。中七は堂々の十音構成になっているが、違和感はありません。ヨコ「ハマ」と「浜」の初夏のリフレインが効いている。